

【計画構成について】

- 事業全体の見取り図や、他の施策のどの事業と関連するかがわかる参照の欄があってもいい。例えば事業に通し番号をつけて参照の欄に事業番号を書いておけば、今後事業を進める際に、他の関連する事業課にも連絡をする必要があると気づくことができると思う。横串を刺すような工夫をしていただければと思う。
- A 3 資料 1 枚目の「歴史に残る街ナゴヤ」のところで、右側にある☆3つと、下にある戦略1、2、3がほぼ同じになっている。それをどのように理解したらいいか。もしかしたら重点戦略は左から導き出されたものではなく、元からあったものになるのではないか。「歴史に残る」がどのようなものか考えたら、例えば魅力が残っているとか人が育つとか、あるいはまちとして形がしっかりしていてまた行きたくなるとか、そういうことが「歴史に残る」ではないかと思う。「歴史に残る街ナゴヤ」を改めて考えて、ここを作り直したほうがいいのではないかと感じる。
- 全体的な事業名が分野によって詳しく書かれているところと、そうではないところがあるような印象を受けたので、精査か加筆をする必要があると思う。
- 記載の順序について関係が無いのであれば関係が無いと書いてもいいのかもしれないが、ある程度重要度とか考えて、書く位置なども考えるべきだと思う。

【成果指標について】

- 成果指標としてふさわしいかどうか気になる点がある。目標としてあげるべき成果指標は、名古屋市の努力によって数字が上下するものを設定するのがいいと思う。市の努力を反映するのにふさわしい指標になっているのか見ていく必要がある。
- 名古屋港に関する成果指標としては、取扱貨物量よりも、全国の港湾の中でのシェアにした方が通りがいいのではないだろうか。
- 多文化共生にかかるところで、227ページの成果指標のところに、もう一つの指標として、実際に名古屋市に住んでいる外国人住民の方が「名古屋に住んで良かった」とどのくらい満足しているかという指標も入れるべきだと思う。
- 成果指標の中で、アウトプット指標とアウトカム指標が混在している。真剣に進行管理をしていくと、アウトプット指標についてはできた理由もできなかった理由も比較的簡単に分かるのだが、アウトカムに相当する市民の満足度はどうしたらいいのだろうかとの議論で終わってしまっているケースが多い。進行管理を考えた場合に、指標の中に性格が違うものが含まれていると明記しておいたほうが次の議論につながると思う。

【多様な主体との連携について】

- 東京一極集中から名古屋市域全体で経済力を強くして、名古屋大都市圏を形成するためには近隣の市町が関係してくる。近隣市町からみると、名古屋と一緒に連携をしていこうという話になると、名古屋から色々な活力を持ってこられるのではないかという期待感とともに、名古屋に何かを持っていかれるのではないかという不安感もある。
- 施策34の成果指標に大学の学生数を増やすとあるが、それを近隣の大学を持っている

市町が見るとビックリするか恐れてしまう。名古屋市が学生数を増やしていくということは、近隣の市町の学生を奪うことになる。この計画の根本として、近隣の市町村との連携を進めていこうという中で、配慮をしていく必要があるのではないだろうか。

○計画全体では圏域のことが書かれているが、港のところを見ると名古屋港のことしか書かれておらず、四日市港については書かれていない。これから連携をどうしていくかということについても計画の中に入れていく必要があると思う。

○名古屋大都市圏としての話は良く出てくるのだが、もう少し視野を広げてアジアの中で名古屋がどのような役割を果たしていくのかが弱い。名古屋は国を越して、アジアの自治体とどのようにつながっていくのかが凄く大事である。それが中期的に言えばインバウンドの増加にもつながる。名古屋がアジアの大きな自治体として、アジアをどのように支援していくのかという視点が欲しい。

○名古屋大都市圏の成長について、なぜ今それをしようとするのかの理由がわからない。時期性の説明が無いので唐突感もあるし、他の自治体からみれば何をしようとしているのかわからないので、不安感を与えることになると思う。

○重点戦略3の「また来たいナゴヤの創出と圏域の活性化」について、その下に載っている事業を実施したところで、「また来たいナゴヤ」となるかという、そうではないと思う。また来たい地域がどのようなものであるか考えた時に、例えば朝市で活力があるとか、寺町が綺麗であるとかで、全てを公共がやるべきものではなくて、民間の活力に魅力があって人が集まるということもある。もう少し官民連携するような話があってもいいのではないだろうか。これは単純に観光プロモーションとかの話ではなくて、もう少し民間が頑張ろうという気持ちにさせるような施策がないのだろうかと思う。

○名古屋が頑張ると周辺市町村に影響を与えと言いつつも、色々なものが小さくたくさんあると非常に無駄である。我々の地域が持っている力を最大限に活かすために、どういう連携をすべきかをもう少し書き込むとともに、連携をすることによって省かれた無駄な部分をうまく出していくことで、専門性を強化してこの地域を本当に考えることができるシンクタンクをつくり出していかないと、シンクタンクが東京や大阪に全部いってしまう。

○この地域の持っている力はどんどん落ちている。もともとの力を高める努力もしていないといけなので、我々の地域における学力やシンクタンク機能を高めるために何か頑張らないと、政策立案能力が減ってしまうような気がする。

○普通に周辺市町との関係を言うだけではなくて、豊田を中心とする西三河の強さと名古屋がどのように連携してこの地域の魅力をつくるかということが書き込まれていない。フワッと周辺との連携というよりは、本当に強い西三河と名古屋がどのような関係をつくるかということを書き込んだ方が、もう少し力強いものになると思う。

○名古屋は今50年か100年に1回の大きなチャンスの時期にある。リニアとレジリエンスを傘（アンブレラ）にすると、この地域で市内全体や広域圏で共通の話題ができる。この機を逸したら名古屋はあと50年は駄目ではないかと思う。

○市民団体、NPO、企業、金融機関、大学と集まって共助社会の場をつくり、そこで交流連携していくことが重要である。

【環境について】

- 環境面のエネルギーで言うと、名古屋は大消費地であり、市としてはエネルギーを生産していない。言い換えれば、CO₂を大量に生産する発電機能は持っていないので、消費するところでより頑張らないと社会に貢献したことにはならない。

【子育てについて】

- 戦略1に「子育て世代に選ばれるまちをつくとともに、地域の活力を高めます」とある。子どもが安心して学校に通うとか、赤ちゃんをきちんと預けるところがあるというのは非常に重要なことであると思う。
- 子どもに対して誇れる親であるかどうか問われているのではないだろうか。若者を含めたしつけや道徳などの啓発については非常に難しい問題である。そういうことを抜かして、魅力だけを伝えるということに違和感がある。行政ががんばりますと書いてあるが、私たち自身も気を遣っていかねばならないとのメッセージが欠けている。自浄努力をどのようにしていくかも問われているのではないだろうか。
- 子育て世代に選ばれるまちというだけではなくて、みんなが結婚するまちというのをに入れてもらいたい。名古屋は未婚率が低いまちで、東京や大阪と比べるとみんながよく結婚しているのだが、更にみんなが結婚してくれないと、いくら魅力ができてここへ来てくれない。みんなが結婚しやすいというか、結ばれやすいまちがどういうものであるかの視点をいれてもいいと思う。
- 子どもが生まれてくる社会をつくらないといけない。名古屋圏の三世帯同居の生活スタイルがモデルになると思う。

【教育・多様性について】

- 日本語指導について書いてあるが、施策10の子どもの学力の部分ではなくて、施策33の多文化共生の部分に入っている。別立てになっているのが残念なところ。良かれと思い多文化共生のところに入れているのかもしれないが、当事者からすると別立てになっていることが本流ではないとされていることになる。
- 指標のところで、「基礎的な学力が十分定着している子どもの割合」の40年度の目標値が80%となっているのは低いと思う。もう少し目標を高く掲げてもらいたい。この目標を達成していくためにも、日本語指導を単に多文化共生問題ではなくて、日本の基礎的な学力の問題であると考えてもらいたい。
- 施策13で「人権が尊重され差別や偏見がない社会をつくります」と書かれているが、具体的な事業を見ると、人権啓発、教育をしますくらいしか書かれていない。あまりに抽象的でやる気が無いように見えてしまう。現状のところ、10年間に人権が侵害されたと思う人が22.1%となっておりかなり高い。この問題を実際に感じている人を解決していく方法が、この施策の中で触れられていないことに違和感がある。
- 人権の問題をどのように書くのかは難しいとは思いますが、個人的な感覚として、このまちは人権を尊重していると感じるのはダイバーシティの多様性が目に見えること。人権のページでもいいので「多様性」の言葉がどこかにあるといいと思う。

【防災について】

- 内閣府が東海地震の強化地域に名古屋市を含むとしてから、10年以上にわたり、名古屋市や大学、NPO、産業界などが様々な対策をしてきた。これは全国的にみても充実した体制であり、現在も進んでいる。戦略2として掲げるのであれば、今後はステップアップを目指していかないとはいけない。
- ボランティアと自治会、消防団の交流の場がない。市民全体で自助力を高めていくためのバックアップも行政でもらいたい。
- 行政が住民を引っ張っていくことも場面によっては重要ではあるが、市民が先導していく形にしないと災害現場では対応しきれないので、そういう意味ではやり方を工夫していくことも必要ではないかと思う。
- 防災の拠点整備についてあまり書かれていない。このところ東京や大阪の防災にかかる教育のセンターと比べると、名古屋はみんなを引き連れて行くにはちょっと弱い気がする。
- 基幹的防災拠点を名古屋にちゃんと造ろうという話があったはずであるが、今回その色が薄まっている気がする。そのような拠点が無いと周辺市町村と広域連携をしようとしても、絵に描いたモチになってしまう。国や県と市の垂直連携の話が防災についても書き込んであるといいと思う。
- 防災のことで言えば土地利用のことが一切書かれていなくて、防災のところと都市計画のつながりのところがどこかに書かれるといいのではないかと思う。
- 大規模な災害に強い社会をつくるのは非常に大事であるが、人のつながりを再構築すべきであると思う。これが強靱な国土をつくるカギである。
- 国土強靱化の地域計画についての話がでているが、市の総合計画とどのように折り合いをつけるか注意する必要がある。

【都市基盤・都市構造について】

- 駅そば生活圏について、この計画の中では住宅都市局の仕事としてしか書けていない。都市構造として交通手段や高層化の話の中で書かれているが、駅そば生活圏の中で、どんな市民がどんな生活を営んでいくのかのイメージが書ききれていない。横串をつなぐような記述があればいいと思う。
- 36ページの都市構造図を眺めてみると、これは将来ではなくて、現在を前提にした図になっている。放射状に鉄道沿いに拡張していくとなっているが、同心円状に拡大していくことがないと、東京一極集中に互するような都市圏は形成していけないのではないかと思う。道路は同心円状にどんどん造られていくのに対して、鉄道は簡単にはいかないというのは分かるのだが、発展の道筋を名古屋市が主体的に示していくことが重要になる。

【情報発信について】

- 名古屋市の情報は、このエリアでは知られているかもしれないが、県外ではほとんど報道されていない。話題づくりを積極的に行い、他所の人から常に「名古屋はおもしろいね」と思ってもらえるような情報発信の仕方を事業として工夫していただきたいと思

う。

- せっかく市がそれなりにやっても、市民にどれくらい情報が伝わっていくのかがすごく重要なところだと思う。広報を本当に市民の目線でシミュレーションをして、本当に使おうとしている人たちに使い勝手のいい情報発信の仕方をしていてもらいたい。
- 2050年をみると、日本はメガリージョンができているのだと思うが、そのど真ん中にある名古屋が埋没しないように、情報発信をしっかりとしていくことが重要だと思っている。

【行政運営・計画の進め方について】

- これからこの計画を実施していく時に重要になるのは、味方をつけるということだと思う。味方につけるべき相手は、市民、大都市圏内の近隣市町村、国内、アジア、欧米という順番だと思うが、名古屋のために何かしようとか、名古屋が魅力的だと思わせることがこの戦略を実施するのに一番重要なことだと思う。
- 戦略を作る上で重要なことは「己を知る」ことだと思う。この冊子の中には名古屋の色々なデータが含まれていて、名古屋を知るのには重要なことなのだが、名古屋が今市民にどう思われているのか、近隣にどう思われているのか、国内の人にどう思われているかを自覚することが一番重要だと思う。
- 市内の各課各係のやっている施策を戦略の中に位置づけて、うまく味方につけることも必要だと思う。まずは市内の各部署を味方につけることが重要だと思う。
- 区が自主性や主体性を持って、区単位で特徴を活かして自由に取り組めるような、そういう部分を更に拡大していくことが不可欠かと思う。区の自主権や裁量権を拡大していただきたい。
- この総合計画は非常にいい計画だと思うので、フォローアップをしっかりとしてもらいたい。